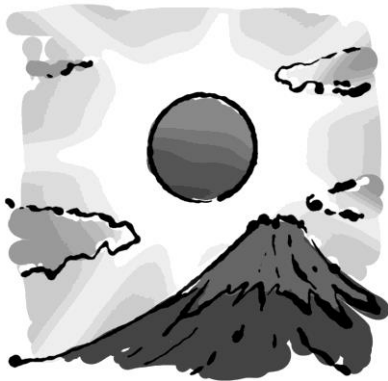


東京五輪の開催の期待で始まった昨年は、コロナ禍による大きな社会変動のうねりの年に様変わりしてしまいました。本年は、心機一転、スタートを切りたいものです。さて、一人ひとりが、新しい年を良い年にするためには、「今年が良い年になる」と信じること、希望を抱くことが肝要です。倫理研究所の創設者・丸山敏雄は、希望の根拠について次のように述べています。

希望は心の太陽である。つごうがよいから希望をもつのではない。一生に二度と出くわすことの出来ぬ仕事だから希望をもつのである。天から与えられた命、親からいただいた体、世界にたった一つのこの肉体だから、その前途にもえるような希望をもつのである。(『万人幸福の菜』第十四条) つまり、良い時だから、希望を持つのではなく、どのような状況でも、生きることそのものが希望の源泉となりえるのです。今年、東日本大震災から十年の節目を迎えます。Tさんは、大学卒業後、結婚し、宮城県北部の町へ移り住みました。男の子と女の子、二人の子供に恵まれ、家族四人で、仲睦まじく暮らす中に、震災で津波に見舞われ、夫と長男を亡くしました。〈生きていることがこんなに辛いなら死んだほうがマシだ〉と、娘と心中することも考えました。ところが、乳飲み子の長女を前に、それも出来ずに、ただただ泣き暮れるほかありませんでした。そんなTさんを救ったのは、両親の愛でした。震災の混乱のなか、ようやく両親と



## 恩の中心にある 我が生命

の電話がつながると、両親は、言葉を発するよりも前に涙を流しました。そして、「あなたが生きていてくれて本当に良かった。もう二度とあなたの声は聴けないのではないかと思っていた」と告げられたのです。その時、心の底から生かされた生命に対する感謝と生きる希望が湧いてきたのです。当時を振り返るTさんは、「それまでは、夫と息子を追って死にたいと考えていた。でも、両親の声を聞いた時、『夫と息子の分まで、生きよう』と思えた」と言います。丸山敏雄が、『実験倫理学大系』内で、「恩」について述べた文を以下で要約します。

「父母の恩を遡ると生命の根元に行きつく。さらには愛育の恩へと広がり、命は人力でどうすることも出来ない大生命の賦与にすぎないことがわかる。その根本は、大宇宙生命にかえる。愛育の恩は、必ず物によって行なわれるため、物質に対する恩に、これらは皆、人の働きによってあるものなので、世はことごとく恩の展開、恩の結集でないものはないことに気づく」

すなわち、自分の生命を取り巻く、すべての物事は、恩の結集であり、感謝の対象であるということを説いているのです。その事実を自覚した時、自分自身の生命の尊さを実感することができるよう。

「生かされている」という感謝の念は、現在の己の幸福感に変わると共に、未来への報恩の希望の源泉ともなりえます。

今「ないもの」を嘆くのではなく、「あるもの」に対して感謝を深めたいものです。